

良い牧者 ヨハネによる福音書 10:1-10

- 「まことに、まことに、あなたがたに告げます。羊の囲いに門から入らないで、ほかの所を乗り越えて来る者は、盗人で強盗です。しかし、門から入る者は、その羊の牧者です。門番は彼のために開き、羊はその声を聞き分けます。彼は自分の羊をその名で呼んで連れ出します。(10:1-3)
 - イエスがこの対話を良い羊飼いの話で始めるのは、盲目の男が会堂から追放されたことが背景にある(9:35)。パリサイ人は自分たちも盲目なのかとイエスに質問する(9:40)。この時点ではイエスと宗教指導者たちの間にははっきりとした境界線があった。
 - この章でイエスはなぜ旧約聖書には羊飼いに多くの引用があるのか、そして彼ご自身がその成就であることをほのめかしている。
 - イエスはご自身を証明するための3つの重要な要素を挙げている。1)門から入る。これはモーセの律法を満たしている。2)門番は彼のために開く。3節の「門番」とはイエスがメシヤであることをあかしするバプテスマのヨハネである。3)羊は彼の声を聞く。人々は彼に従っている。
- 彼は、自分の羊をみな引き出すと、その先頭に立って行きます。すると羊は、彼の声を知っているの
で、彼について行きます。しかし、ほかの人には決してついて行きません。かえって、その人から逃げ
出します。その人たちの声を知らないからです。」(10:4-5)
 - イエスがここで羊飼いが囲いから羊を引き出すたとえを使っているのは、9章で明らかになった宗
教指導者たちとイエスの対立が関係している。羊の囲いとはユダヤ教や古い宗教的システムを指
す。イエスはご自身の羊を古い宗教的システムから導き出し、「指導者たち」はイエスの声に従お
うとする羊に対する権限を失いつつあったのでイエスと宗教指導者たちの対立は今や著しいものとな
っていた。
 - イエスの時代の羊小屋とはコミュニティーで共有する囲いで、周りの羊飼いたちが夜の間羊を守る
ために羊を連れて来ていた。イエスは今「ご自身の羊すべて」を連れ出している。
 - 実際、羊飼いが呼ぶと自分の羊だけが従ってくる。イエスの場合、「見て」「聞いて」神の声を聞
き分けられる者だけが従ってくる。
- イエスはこのたとえを彼らにお話しになったが、彼らは、イエスの話されたことが何のことかよくわか
らなかった。そこで、イエスはまた言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたし
は羊の門です。わたしの前に来た者はみな、盗人で強盗です。羊は彼らの言うことを聞かなかったの
です。(10:6-8)
 - イエスは今までに多くの王、偽預言者、力のある指導者たちが神の子らを迷わせ、偽の神々や偶像
に従わせようとしたのをご存知で、イエスはそのような者ではないと宣言される。
 - イエスはパリサイ人たちが良い牧者のたとえを理解できなかったのだからに説明を続ける。イエス
は羊を導く門であり、羊小屋の門ではない。この2つの門は異なるものである。イエスが羊の門だ
とおっしゃっているのは、羊飼いが羊の群れを小屋に連れ帰って来ず、外ですべての羊を洞窟に集
めその洞窟の入り口で寝る牧者のイメージである。まさに彼が門なのである。
- わたしは門です。だれでも、わたしを通過して入るなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見
つけます。盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来た
のは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。(10:9-10)
 - イエスは「私は門です」という表現のより深い霊的意味を説明される。イエスはご自身を通して入
る者は救われ満たされるとおっしゃっている。
 - イエスはそれを「盗人」の本当の危険性と照らし合わせている。イエスの救いは、盗人の存在とそ
の目的である「盗んだり、殺したり、滅ぼしたり」という観点から初めて大きな意味を持つ。
 - イエスが与えてくださるものは、救い、守り、満たし、豊かないのちである。